

---

# 彼女の嫉妬

瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の嫉妬

### 【著者名】

瑠璃

【ZPDF】

N1483M

### 【作者名】

瑠璃

### 【あらすじ】

(まつたく)

レイフォンを意識する様になつてから良く使い言葉を心の中でつぶやく。

フエリの視線の先 - - 10m - - ほど先には、仲良ぐ一

人で歩くレイフォンとリーリンの姿がある。

(まつたく、わたしはいつたい何をしているのでしょうか~)

フエリ視点の話です

(前書き)

初投稿

フェリ視点Onkyのはずです。

時間軸は基本無視、それでもよい方はどうぞ

(まつたく)

レイフォンを意識する様になつてから良く使つ言葉を中心でつぶやく。

フヒリの視線の先 - - 10m - - ほど先には、仲良く一人で歩くレイフォンとリーリンの姿がある。

(まつたく、わたしはいつたい何をしているのでしょうか~)

暇なので何か雑誌でも、と雑貨店に入る直前で想い人の姿を目の端で捉えたと思ったらその想い人は女連れて歩いていたので何故か物陰に隠れながら尾行すること15分。何度も止めようと思つたのだがその度に楽しそうな笑い声とかが聞こえてくるのだ。

(あの馬鹿は何をそんなに楽しそうにしているのでしょうか~?)

心の中にもやもやが溜まつていぐ。

念威を使えばいくらでも探しを入れることは出来るのだが念威操者の念威の私的利用は禁じられている。

そう簡単に見つかるつもりはありませんがあの馬鹿に感づかれる」と厄介です。

何せレイフオンは普段でもツヨル一の武芸者とは比べ物にならないほど鋭いのだ。

このやのじと組をかけてやのいかと懸わないじとや無このだが、  
そのせいで眞まことに雰囲気を味わうのせ「メン」だ。

(なんかイライラしますね)

本気で念威を使おうと鍊金鋼に手を伸ばしたとき。

『じゃあまたね、リーリン』

# 声が聞こえた。

（これはチャンスです）

一方的にのつたイラをぶつける為に物陰からでると、リンがいなくなるのを図つた様に二ーナが出てきた。

二ーナと田が合いそうになり慌てて隠れる。

これはもう本格的に念願しかありませんね。

即座に鍊金鋼を復元し念威端子を二つ解き放つ。

『あれ? どうしたんですか先輩』

『いや、特に用はないが姿を見かけたからな』

『はあ・・・』

『そ、そんなことより。なんだか嬉しそうだが何かいい事でもあつたのか?』

二ーナはあえて聞いたが第十七小隊の人間ならその理由は大体分かる。

『いい事、ですか?・・・リーリンと和解できたのはもちろんいい事ですけど、やっぱり養父さんに許してもらえたのが大きい、ですな』

『そうか。・・・ハーレイが言つには持つてている鍊金鋼を全て刀にするそうだな』

『はい、何だかんだ言つてもサイハイーデンは刀ですから』

レイフォンはツェルニに来た時に比べれば武芸に対する考え方が変わっている。以前は武芸を強制される事に対して嫌悪感を抱いていたが、今では積極的に、とまでは行かないものの、少しあり武芸を嫌っている事はなさそうだ。

『すまない、私はこれから買い物があるからな。失礼させてもらひ』

『あ、なら荷物持ちでもしましょうか?』

『いや、いい』

もうこいつは二ーナは商店街の方に歩いていった。

(今度こそ)

動こうとした瞬間、念威が三人の少女を捉えた。

(確か・・・)

ミハイ・ロッテン、ナルキ・ゲルニ、メイション・トリンデン。

(フォンフォンのクラスメート。・・・こんなタイミングで)

レイフォンに対し理不尽な怒りが蓄積していく。

意図的にレイフォン達の会話をシャットアウトする。

(はあ。いったいわたしは何をしているのか・・・)

念威を回収し鍊金錠を基礎状態に戻す。

気についても仕方ありません。今日はもう帰りましょう。

時刻は大体、午後の2時。今から帰つてもすることができ無い。

どこの喫茶店にでも寄つて適当に時間を潰しましょう。

さて、そろそろ帰りますか。

フュリは席を立ち会計を済ます。「ありがとうございました」と声に背中を押されて店を出る。

カラーンカラーンと、店の扉が音を立てる。

「あれ、フュリ先輩」

数時間にわたって尾行をしていた対象が目の前にいた。

「…………」

「えーっと、何してるんですかフュリ?」

殆んど反射的にレイフォンを睨むと彼は慌てて言い直す。

「それはわざわざレイフォンに報告しなければなりませんか?」

「いや、えっと…………そんなことはないです。はい」

「特に何もしていません。ただプログラミングいただけです

「はあ…………ツツツツツ…………」

フュリは渾身の力でレイフォンの脛に蹴りをいたた。

「痛ッ、なにするんですか?」

よほど痛かったのだろう。レイフォンが涙目で訴えてくる。

(いい気味です)

フヨリは少しスッキリした。

「今田一田<sup>チタ</sup>一<sup>チ</sup>と女の子と一緒にいた罰です」

「いや、それは関係な……ってなんでフェリが知ってるんですか？」

(しまった！？)

「ぐ、口が滑りました。」

「口が滑ったって事は……尾行でもしてたんですか！？」

「別にいいじゃないですか。と言つよりフォンフォンがわたし以外の女の子と一緒にいるからいけないんです」

言つたとたんに大変な事を言つたことに気が付きつつもぐ。レイフォンに赤くなつた顔を見られたくないからだ。

「はあ。なら、あの事も知つてるんですね」

何かを諦めたよつて言つ。フヨリが何故俯いているかは分かつていなうよつだ。

(……あの事？)

フエリが尾行していたのはレイフォンがメイション達に会つたところまでだ。それまでにレイフォンが言つ、「あの事、にあてはまるような事は無かつたはず。つまり、あの事、とはそれより後でメイション達と何かあった、と言つ事だらう。それが今まであつた恥ずかしさが引いていく。

(しかし・・・)

メイション達に会つてからは尾行していないので知りません。と言つのは何故か癪だ。

「ええ。とても悲惨ですね」

「ですよね・・・」

氣になる。非常に氣になるがああ言つてしまつた以上、やつぱり知りませんと言つのには抵抗がある。こんな時自分のプライドが嫌になる。

「はあ  
「はあ

二人の溜め息が重なる。

「あの、フエリの家まで送つてこきましょつか?」

レイフォンは寮、ではなく家、と言つた。

(まあ、フォンフォンからしてみればわたしの住んでいる所は家

なんじょひね)

「当たり前です。そろそろ暗くなるのにか弱い少女を放つて置くと? フォンフォンはそんな非常識人なんですか?」

「か弱い、ですか・・・」

レイフォンは自分の脛になんとなく視線を落とす。

「・・・何か?」

「い、いや。なんでも・・・」

「なんでもないなら帰ります」

「あ、ちょっと待つてくださいよ」

一人で帰路につく。元々レイフォンの寮はフュリの寮と方向が同じなので送つていいくつもりがなくとも途中までは一緒なのだ。

フュリの寮に着くまでの間、一人はたわいも無い会話をした。

わたしがフォンフォンと今日最後に言葉を交わした女の子。

そう考えるとなんだか気が楽になつた。

「それじゃあまた明日」

いつの間にかフュリの寮に着いていた。

（もつとの時間が続けばよかつたのに・・・）

愚痴を言つても仕方ないが本氣でそう思つた。

「ではまた明日」

レイフロンが自分の寮に向かつて走つていぐ。その背中が見えなくなるまでフェリは見ていた。

玄関で靴を脱いで中に入る。

どうやら兄はまだ帰つてきていないようですね。

リビングの状態を見てそつ結論付ける。

（都合がいいですね）

自分の部屋にはいり、電気を付ける。

ベッドの側まで行き大きな枕を手に取つてバレー・ボールの様に上に投げる。

落ちてきたソレを右手で思い切り殴る。枕が壁にぶち当たる。

枕がやわらかかったのと、部屋の防音対策がしっかりしていた為、外に音は漏れなかった。

（いつたい、あの事とは何なのでしょう？）

ベッドに落ちた枕にもう一撃加える。

(まあ、考えても仕方ありますよ)

シャワーで軽く汗を流し、髪を整えてベッドに入る。

(また明日にでもフォンフォンを絞める必要がありそうだですね)

フンはそういう決意し跟につに落ちる。

(後書き)

誤字、脱字があればどうぞお書き下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1483m/>

---

彼女の嫉妬

2010年10月15日00時54分発行